

信仰と生命との関係

人は何のために信仰するのか。信仰の目的とはいったい何だろうか。

こうした問いにはさまざまに答えることができるが、一般的に言って、人が幸せに生きることにあると答えて、とくに間違いはないと思う。だとすれば、信仰していて不幸せな気持ちを抱いているとしたら、その信仰にはどこか問題が潜んでいると言ってよいのではないだろうか。

人それぞれに幸せを感じる時がある。それは多くの場合、自分が生き生きと主体的に生きている時ではないだろうか。信仰生活においても然り。その時、信仰者は自分の生命が伸び伸びと発揮されていることを実感しているはずだ。そこでは信仰そのものもまた、生き生きとしたものになっている。

逆に、自分の生命が阻害されたり抑圧されたりして、萎縮していると感じたとき、人は決して幸せを感じることはできない。そして、そこでは信仰そのものも生彩を欠いたものになっている。だから、いくら言葉を尽くして教を説こうとしても、自分にも他人にも響いてこない。なぜなら、自分の生命に対して正直になってはいないからである。

信仰の本末関係と信仰復興運動

一つ思考実験をしてみよう。

あなたが代を重ねた信仰者ならば、自分が今、信仰を初めて我がものとして得たと仮定してみる。あなたは信仰初代である。いや、初代という意識さえない。まして、他人のことも組織のことも眼中にない。あなたの眼差しは、まっすぐに神仏に向けられている。

あなたの信仰は、自分が救われたという確信から出発している。このとき、自らの信仰がいかに生き生きとし、生命が伸び伸びと羽ばたいているかを、ひたすら感じるはずだ。信仰仲間が作っている組織もあるかもしれないが、そんなものは気にもならない。自分の信仰の定規に照らして判断して、適合していれば重んじるが、適合していなければ、無理にこだわる必要もない。まして、人や組織に振り回されるなど、本末転倒である。

ここで思考実験を停止し、こんどは現実の自分の信仰のありのままを振り返ってみる。

自分自身に誠実な信仰者であれば、いかに自分が周囲の信仰仲間の思惑を気にし、信仰組織に気を使っているかに、はたと気がつくはずであろう。もしかしたら、生き生きとした信仰実感を見失い、幸福感も味わえない原因の一端もここにあるのではないかと思うかもしれない。

この思考実験は、宗教における信仰復興運動というものの必然性を検証するものである。この運動は、キリスト教ではリバイバル運動とも言われる。しばしば熱狂的な大衆伝道の形を取るがゆえに誤解されやすいが、その原意は、信仰が形骸化し教会が世俗化しているとき、再び生き生きとした信仰に立ち返らせるということなのである。

大多数のキリスト教は、それぞれの教会組織に所属している。彼らが信仰しているのはキリスト教の教会ではなく、キリスト教である。いや、より正確にいえばキリスト教ではなく、イエス・キリストを信仰しているのである。重要な順から挙げれば、キリスト、キリスト教、キリスト教会ということになる。これが信仰の本末であるが、往々にして優先順位が逆になって

しまうことがある。

信仰復興運動は、どの宗教においても繰り返されるものだし、繰り返されなければいけないものである。なぜなら、信仰者が人間として生き生きと生きることができるためにこの運動が必要だからである。そして、信仰者が生き生きとすれば、その宗教も活力を再び増してくる。宗教が時代を超えて生きたものであるためには、信仰復興運動は不可欠なのである。

内村鑑三の現代的意義

信仰の本末が問われる現代、私は、キリスト教であるなしにかかわらず、信仰者にとって、内村鑑三(1861-1930)の諸著作を読む意義があると考えられる。

キリスト教にあつては、カトリックは2000年にわたる歴史と伝統を誇っている。世界中に及ぶ堅固な教会組織を形成し、その権威と自信たるや揺るぎないものがある。そこでは、教会とは救済史に位置づけられるべき「聖なる実体」である。これに対し、プロテスタントでは、教会はむしろ、許された罪ある存在としての人間の集会である。信仰者は、教会的権威に頼らず、自ら聖書を直接読んで、そこに神の言葉を聞こうとする。

こうしたプロテスタント主義は、それ自体、信仰復興運動の姿そのものであると言えよう。そして、プロテスタント主義を徹底化するならば、それは教会組織そのものからも精神的に自由なキリスト教、すなわち内村鑑三の言う無教会主義にならざるをえないのである。

誤解を避けるために言うておくと、無教会主義は反教会主義という意味ではない。無教会主義とは、別の言い方をすれば「一人一教会主義」でもある。だから、信仰者はちゃんと自分の「教会」を持っているのである。また、信仰者の側にしっかりした自己批判の契機が存在するならば、我流信仰に陥るといってもない。無教会主義にあつては、いわゆる教会に入出入りしないからといって、不信心ということにはならないだけである。

内村自身、なにも教会が不必要だと説いているわけではない。まして、人々に教会を脱退せよとは勧めているのでは、決してない。むしろ内村は、自ら信仰の指導を行った者が某教会に入会した時、彼を祝福したぐらいである。「真心をもって主を信じる者はみな私どもの兄弟である」(『キリスト教問答』)と言うように、内村が目指したのは、教会に属する属さないにかかわらず、同一の主キリストを信じる霊の共同体であった。

ポイントは、ひとり神以外に頼む心を持たない主体的信仰を確立するところにある。これは、内村が信仰生活の最初から貫いた姿勢である。若干35歳のときに刊行された彼の自伝『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』を読むとよい。そこには、「異教徒」から「キリスト信徒」に回心する過程での、長きにわたる霊魂の苦闘、キリスト教文明との対峙や格闘が数多く書き留められている。しかし、読者はそこに、自主独立にして意気軒昂な若き内村の信仰が、生き生きと脈打っているのを十二分に読み取ることができる。この信仰の中には、「レディメードキリスト教」の与かり知らぬ深い実存的価値がある。

他人志向的、組織依存的な信仰から脱却して、信仰を再び自分自身の内に取り戻し、生き生きとした信仰、伸び伸びと羽ばたく生命の躍動を獲得するならば、信仰の喜びもまたそこに湧き上がってくるであろう。今日、内村鑑三を読む意義は、そのための手掛かりを得ることにあると言ってよいのである。